

# 双方向メディアとしての明治期農業雑誌

## ——付・博文館刊行『日本農業新誌』 解題・総目次——

石川 雄輝

### はじめに

『日本農業新誌』は、明治25年（1892）1月から同27年（1894）12月まで博文館から刊行されていた雑誌である。<sup>(1)</sup> この雑誌は、後に同じ博文館から刊行される総合雑誌『太陽』の前身誌の一つであり、ピーク時には毎月平均9千を超える発行部数を記録する農業雑誌であった。<sup>(2)</sup> また、明治期の農学・農政に大きな影響力を持ち、後に東京農業大学の初代学長に就任することとなる横井時敬<sup>ときよし</sup>が一貫して主筆を務めた雑誌でもある。

したがって、後継誌である『太陽』についての研究や明治期の各種雑誌の研究においてある程度注目されて然るべき雑誌であると考えられる。しかし、現状において『日本農業新誌』について言及した先行研究は少なく、その内容も断片的なのがほとんどである。また、明治期の農業雑誌研究そのものも、現時点で活発に行われているわけではない。

そこで本稿では、まず明治期農業雑誌の研究史を追い、博文館から刊行されていた時期の『日本農業新誌』を通観する。そしてその上で、明治期農業雑誌のさらなる研究可能性について検討したい。

具体的に考えられるのは、農業雑誌が持つ双方向情報媒体としての側面である。これを重視して研究を進めていくことにより、明治期における地方間・読者間の情報流通のあり方やメディア受容の様態などを明らかにしていくことが可能になると考える。

また、総目次を付すことで資料として利用に供することも目的とする。現時点で『日本農業新誌』を全号一括して所蔵している機関は、国立国会図書館も含めて見当たらない。<sup>(3)</sup> そのため、記事の題名や著者名を一覧できることによる便益は少なくないと思われる。

紙幅の関係上、本稿では創刊号（明治25年1月5日発行）から第1巻第6号（明治25年3月20日発行）までの総目次のみを掲載する。なお、残りの第1巻第7号（明治25年4月5日発行）から第3巻第12号（明治27年12月5日発行）までのデータについては、リテラシー史研究会ホームページ（<http://www.f.waseda.jp/a-wada/literacy/>）に掲載する。

## 1 明治期農業雑誌研究史

本節においては、まず明治期農業雑誌の研究史を概観する。

農業雑誌というくくりが研究・調査上初めて登場するのは戦後になってからであり、農業発達史調査会が行った調査<sup>(4)</sup>が最初であろう。この中に、5年以上継続した農業雑誌について創刊・廃刊を線で示した年表があり、『日本農業新誌』と思われるものも登場している。<sup>(5)</sup>

この調査の後、15年にわたる研究史の空白を経て、経済思想史を専門とする杉原四郎が経済雑誌の広範囲にわたる網羅的な調査・研究を開始した。この中に、博文館の雑誌に関する研究も存在する。<sup>(6)</sup> この研究の中で杉原は博文館発行の諸雑誌に簡単な解説を加えており、これは『日本農業新誌』が具体的に研究の対象となつて以降、この雑誌についての最初のコメントとなる。

杉原が手掛けた経済雑誌の研究において言及が多い農業雑誌は、学農社の『農業雑誌』<sup>(7)</sup>と日本農業社の『日本農業雑誌』<sup>(8)</sup>である。前者は明治初期から長く続いた農業雑誌の老舗・先駆けとして、後者は杉原の研究対象であった河上肇が積極的に寄稿していたことから、何度か取り上げられている。先に述べた博文館関連の研究から派生して言及された『日本農業新誌』とあわせて、杉原の研究における三大農業雑誌といってもいいだろう。

『農業雑誌』は、明治期経済雑誌の代表格と目される『東京経済雑誌』との類似性<sup>(9)</sup>から、杉原研究以前にも経済思想史研究においては意識されてきた。しかし、その興味は『東京経済雑誌』においては田口卯吉、『農業雑誌』においては津田仙といった、ある思想家個人を研究するための手掛かりとして持たれていたものであった。この点においては杉原が『日本農業雑誌』と河上肇に注いだ視線も同様である。<sup>(10)</sup>

このように広い範囲に及ぶ経済雑誌研究に着手した杉原は、研究が進んでいくにつれて次第に各分野の雑誌を分類していくようになる。これはあまりにも広い研究対象それぞれに一応の範囲を設定するものであり、これによって杉原研究における「農業雑誌」というカテゴリーは生み出された。そして杉原は農業雑誌のより専門的な調査・研究を藤井隆至に託し、自身は経済雑誌研究全体を取りまとめる役割を担うこととなった。

藤井は農業雑誌研究の成果として、『日本農業新聞雑誌所蔵機関目録』<sup>(11)</sup>を刊行した。そしてその翌年、杉原はそれまでの経済雑誌研究をまとめて『日本の経済雑誌』<sup>(12)</sup>として世に送り出した。その間、杉原は経済雑誌の各分野についての研究をそれぞれ専門の研究者に依頼しており、3年後には『日本経済雑誌の源流』<sup>(13)</sup>とし

てまとめている。これは杉原による雑誌研究の一応の到達点ということができるだろう。杉原はこの中の「はしがき」において自らの経済雑誌研究を振り返り、その一旦の終結を宣言している。そして、以下のように続ける。

雑誌には評論誌の側面の他に情報誌の側面があり、前者が思想史の研究にとって重要なものに対し、後者は経済史（経済政策史、産業史など）にとって重要な意味を持つ。ところがこの面の雑誌研究は、一人の手では困難で、各部門の専門家によって追求されるべきである。そこで私は友人たちと語らって、情報誌としての経済雑誌の共同研究を行い、その成果を評論誌の側面の研究と合わせて刊行するという企画を立てたのである。<sup>(14)</sup>

その結果がこの『日本経済雑誌の源流』であり、評論誌と情報誌という両側面を考慮したという点も、経済雑誌研究の到達点であるということのできる理由の一つである。

この中の一章、「農業雑誌」を執筆することになった藤井は、「農事改良雑誌」と「農業政策雑誌」という2つの分類を設定した。そして「明治の一桁代からはやくも特筆すべき農事改良雑誌が現われている」として、『開農雑報』と『農業雑誌』を紹介している。<sup>(15)</sup> 前者は政府系の主体が発行し、後者は明六社の同人であった津田仙が発行していることに触れ、これらの「農事改良雑誌」としての特徴を述べている。

使命感に燃えた啓蒙的知識人と上京してきた農事改良家たちが共に農学を学び、雑誌を通して広く啓蒙しようとする性格が強く見受けられる。（中略）雑誌は単行本に比べて廉価であるばかりか、郵便を利用した定期購読制を主にしたから、読者が地域的に限定されることが少なく、しかも定期的に手元に届くこともあって、全国各地の農事改良家たちに与えた影響は決して小さくはなかったと思われる。<sup>(16)</sup>

この指摘は、明治期農業雑誌の特徴の一面を簡潔に言い表している。一方で藤井は、1890年代から政策による農業保護の必要性を主張する「農業政策雑誌」が登場したと述べる。松方正義による緊縮財政に伴ういわゆる松方デフレによって、それまで民間の農事改良の担い手であった豪農層が没落していったことも大きな原因であるという。しかしこの「農業政策雑誌」においては保護主義の具体的な議論はほとんどなされず、いつしか時代がそれを必要としなくなり、没落した小農を守る社

会政策的な色彩を次第に帯びるようになったと結んでいる。

特定の分野に絞って資料を精査し、それまでの誤謬も修正しながら全体の歴史を概観するこの研究には相当の価値がある。しかし、藤井の農業雑誌論もまた主体・内容に着目した杉原の「評論誌」研究の延長にあり、やはりこれも経済思想史研究の一部から抜け出すものではなかったということもできるだろう。

以上のように、農業雑誌の本格的な研究は、杉原による経済雑誌の研究の一部として進んできた。そして、これらは基本的に思想家の研究に資するための史料調査という形での雑誌研究であった。これからの研究においてはそれを乗り越えて、経済思想史の枠組みでは必要とされずに見逃されてきた細かな事実や新たな視点を明確にし、成果をより発展させていくことが重要である。

杉原・藤井以降の明治期農業雑誌に関する数少ない研究として、まず友田清彦の業績が挙げられる。友田は、学農社『農業雑誌』の総目次の一部を発表した。<sup>(17)</sup> また、明治14年(1881)に刊行が開始される『大日本農会報告』以前の農業雑誌を「初期農業雑誌」として、「農学校などの農業教育機関と農業研究会的な農業結社の2つこそが」、<sup>(18)</sup> その最有力な基盤であったと述べている。

そして、最も興味深い直近の研究として、福澤徹三のものを挙げるができる。<sup>(19)</sup> この中で福澤は、それまでの先行研究について「農業思想自体の検討が中心で、農業雑誌の受容についての検討や、地域との関わりについての分析が手薄である」と指摘し、その上で『日本農業新誌』を含む農業雑誌の内容を読者がどのように実践していたかを論じている。その中で、明治期の農業雑誌(とりわけ「農事改良雑誌」)の特徴といえる「読者参加型ページ」は、学農社の『農業雑誌』が確立したスタイルであると指摘されている。

このような当時の主な農業雑誌の状況や特徴を述べた後に、福澤の論は、ある一人の読者がいかにして農業雑誌を入手し、利用し、活用していったかというところに焦点を絞っていく。当時の状況を読者の側から記述しながら展開していくこのアプローチは、農業雑誌研究においては画期的である。情報の流通やメディアの受容という観点から接近を図ったこの研究は、本稿の持つ問題意識と重なる部分が多い。

## 2 『日本農業新誌』創刊まで

本節では、『日本農業新誌』が創刊を迎えるまでの流れを記述していく。この雑誌に言及するにあたって、まず主筆を務めた横井時敬の経歴に触れる。その上で、前身誌『産業時論』を紹介する。そして、その雑誌が博文館に譲渡され、改題されるまでについて述べる。

横井時敬は、万延元年(1860)、熊本藩士久右衛門の四男として熊本に生まれた。

幼時には藩校で漢学を、後に熊本洋学校で英学を学んだ。明治11年（1878）、駒場農学校に入学し、同13年（1880）に卒業した。翌14年（1881）神戸市師範学校講師兼植物園長、さらに翌15年（1882）には福岡県立農学校教諭となり、農学校が農業試験場になると同時に場長に就任する。明治22年（1889）、農商務省技師となるが、1年で退官する。同24年（1891）、帝国大学農科大学教授となり、大正11年（1922）に退官した。その間、明治30年（1897）に東京農学校長となり、同44年（1911）に後身の東京農業大学の初代学長に就任している。その後、昭和2年（1927）、東京の自宅において68歳で没した。横井は「農業教育界の大御所的存在」であり、農学者としてだけでなくエコノミストとしても活動し、小農保護政策を主張した。<sup>(20)</sup>

このように横井は、農学者でありつつ農業試験場長も務めた経歴を持つ、いわゆる啓蒙的知識人であった。「理論と実践」という理念の下に、雑誌というメディアを通して知識を広めていこうと自ら雑誌を旗揚げするのは、農商務省の技官を辞した頃のことである。

さて、『日本農業新誌』の前身誌は、この横井が主宰していた『産業時論』という雑誌である。<sup>(21)</sup>『産業時論』は、産業時論社（東京市小石川区指ヶ谷町二番地）によって、明治23年（1890）11月から同24年（1891）12月まで月2回（毎月10日・25日）発行されていた。<sup>(22)</sup> 定価は一冊6銭5厘、三ヶ月分で37銭、半年分で72銭、一年分で1円20銭（いずれも送料込み）であった。一号あたりのページ数は平均して約40ページであり、記事は「論説」「雑録」「通信」「問答」「雑報」から成っている。

この雑誌が『日本農業新誌』に衣替えした経緯について、『博文館五十年史』に以下のような記述がある。

農学士横井時敬氏は、「産業時論」なる雑誌を発行せしが、経営困難なる故、其の引受を本館に求め、本館は諾して「日本農業新誌」と改題し、明年一月より新たに発行することに決した。是が後年の「農業世界」の濫觴である。<sup>(23)</sup>

このように、『産業時論』は横井の側から働きかける形で博文館に引き渡されたとされている。<sup>(24)</sup> この後も二度の出版社変更を経ることになる『日本農業新誌』だが、主筆は交代することなく一貫して横井が務めた。また、博文館という成長著しい企業から刊行されることになるということは、雑誌そのものが広告化されることにもつながるが、それでも横井は雑誌の刊行を続ける意思を持ち続けた。これらのことから、横井が雑誌という媒体で情報を発信し続けることへのこだわりを持っ

ていたことが窺える。

### 3 創刊から『太陽』統合まで

本節では、『日本農業新誌』がどのような狙いで発行されていたかについて最初に触れ、その後の誌面における記事の分類の変遷を追っていく。それにより、この雑誌が農業の専門雑誌として充実した誌面構成を持っていたことを示していく。

明治25年（1892）1月5日、『日本農業新誌』の第1巻第1号が博文館から発行された。<sup>(25)</sup>表紙には「恭賀新年」と題された博文館による発刊の辞が寄せられている。

（前略）我博文館は創立以来未だ五年に過ぎされとも幸に江湖君子の愛顧に依り文運の隆盛に伴ふて業務月毎に繁昌し今や全国到る所（中略）我か博文館出版物を見ざるなし、（中略）依て本年以後は益事業を拡張し、現在の館員客員の外更に博識の名家を増聘し書籍雑誌共に大改良を加へ材料の撰択、印刷製本共に精確鮮麗を期し、且つ博文館独得の長所として代価は弥々低廉を主とし、聊敢て皇国文化の万一に資せんとす従来博文館諸雑誌の外本年より新たに発行すべきものは日本農業新誌、農業全書、女学全書、普通教育全書にして特に大に教育及実業上の図書出版事業を営まんとす依て多く教育上農業上の学士名家を招聘して其執筆を依頼し該事業の参画を委託せり。（後略）

（引用者注：変体仮名・合字、旧漢字は現行のものに改めた。以下の引用も同様。）

この記事から読み取れる重要なことは、他のシリーズと共に教育・啓蒙という目的を前面に押し出している点である。『日本農業新誌』という誌名にも表れているように、「皇国文化の万一に資せん」として、日本国中に広く「教育及実業上の図書出版事業を営まんと」する狙いが看取できる。<sup>(26)</sup>

また、創刊号の56ページでは「旧産業時論愛読者諸君に稟告す」という記事で、購読者に対して通知を出している。その要点は、①『産業時論』へ既に払い込んでいる金額分の『日本農業新誌』を届けること、②ただし改定後の価格で計算すること、③『産業時論』時代からの「通信者」には引き続き通信を求めること、④これまで無料で贈呈していた分については代金を請求する場合もあること、の4点である。

このように、企業としての出版社である博文館は、既に代金が払い込まれている分に関しては送付を保証する一方、これまで産業時論社が無料で進呈していた分については代金を払わせる姿勢を見せた。定価は一冊あたり8銭と改定され、送料込

で9銭5厘、三ヶ月分で51銭、半年分で97銭、一年分は1円84銭とされている。<sup>(27)</sup>

『産業時論』では40ほどであったページ数は、60ページ前後に増えた。表紙や巻末には博文館による多くの自社広告が展開され、広告媒体として大いに活用されていたことがわかる。誌面の構成は、主筆の横井による「社説」、農学士等による「論説」・「講義」、農商務省による各地の調査などを掲載する「雑録」、比較的短文の記事による「随記」、小説や短歌などを扱う「余興」、日本各地の農業実地家からの投書によって成る「通信」、有識者による「寄書」、読者同士で質問・回答を共有する「問答」、ニュースや地方からの短信などを載せる「時事」、コーナーに昇格した「種苗交換」、政府による褒賞授与の報告や命令、調査結果の発表などから成る「官報」と、豊富になった。また、毎月目次の次のページに口絵があり、様々な題材で図版が掲載されていた。<sup>(28)</sup>本文中にも多くの図表が使われ、特に問答欄では道具の作り方の説明等に活用されている。

また、翌月の第1巻第3号（明治25年2月5日発行）から、目次の下に「投書心得」が記載されるようになった。その要点は、①封筒に書くべき宛名、②投書はひらがなで明瞭に書くこと、③原稿を一度に複数送る時はそれぞれに住所氏名を書くこと、④返書が必要な場合は切手や葉書を同封すること、⑤原稿は発行の15日前までに編集局に到着させること、⑥以上を守らない場合は没書とすることがある、となっている。ここからは、投書慣れしていない一般読者に対する配慮が見える。<sup>(29)</sup>

第1巻の最終号である第24号（明治25年12月20日発行）の26ページには「日本農業新誌大改良広告」と題した記事が掲載され、第2巻第1号（明治26年1月5日発行）からは「論説」「講義」「特別寄書」「叢譚」「散録」「文苑」「寄書」「問答」「雑報」「種苗交換」「官報」という構成に改まった。<sup>(30)</sup>さらに、この年の最終号である第2巻第24号（明治26年12月20日発行）では、冒頭に「明治廿七年後の日本農業新誌」と題された記事が掲載され、さらなる誌面の再編成を知らせている。

我日本農業新誌は発刊以来年に月に発売の部数を加え今や遂に洛陽の紙価を貴からしむるの隆運に達せり（中略）宜ろしく益々奮起して当初の目的を貫き以て農界否な国家に対し尽誠の実を挙ぐるの計をなすべきなり（中略）是に於て発兌の回数を減して月一回となし以て財多からざるもの、為めに便にして知識の普及を図り又た編纂の方法に一大革変をなし部門を左の如くに分ちて蓋し趣味あり実益あるの材料を愛読者諸君に献せんことを旨とせり

日本農業雑誌●経済●教育●耕種●養畜●養蚕●製造●雑門

●余興●問答●時事●種苗●官報●農民倶楽部記事

惟ふに論説特別寄書寄書等の欄を分つは是れ掲載の事項に軽重をなすの実なき

にあらずして本誌載する所悉く金玉ならざるはなきに豈に若く軽重の差をなすべけんや寄稿者諸君に対するの礼宜しく此の如くなるべからざるなり抑も亦た各欄収むる所各種の事項混錯するは読者に便なる所以にあらざるを悟れるか故に事此に及へるのみ（後略）

この変更の重要な点は、寄せられた記事の具体的内容からの分類とすることであり、それまでの投稿者の属性（学士か、地方実地家かなど）に強く左右される分類から脱却したという部分である。編集部に寄せられる情報に軽重はなく、全てに同様の価値を見出そうとするこの姿勢は、誌面上における属性格差が緩和されたことを示している。

翌明治27年（1894）、月1回（毎月5日）の発行に減ったが、前述の通り平均発行部数は1万に迫り、『日本農業新誌』の最盛期を迎える。ところが、第3巻最後の第12号（明治27年12月5日発行）の時事欄67ページの「歳暮の辞」と題された記事によって、この雑誌の廃刊と『太陽』への引き継ぎが発表される。

明治廿七年も既にして末月に及べり、余輩新誌記者は茲に筆硯に休暇を命し、暫らく文壇を退き静に明年を待ちて復た読者諸君に見えんと期せしが、博文館大に時勢に見る所ありて、本誌を廃刊し諸雑誌を集めて大成せる「太陽」を以て之に代へんとするに決せり、余輩記者に取りては多少の憾なきを得ず、但だ夫れ本誌の廃刊を痛惜して代りて之れが発刊に従ふものあるを得たること、広告に見ゆる所の如し、余輩聊か以て自ら慰するを得たるのみならず、産業時論以来大方の愛顧に負かざるに幾からんを喜ぶ（後略）

博文館は『日本農業新誌』を廃刊し、雑誌『太陽』の農業欄とすることを決定した。そして誕生した『太陽』の農業欄には「中外の新現象を採りて必要有益の事項を記述し、以て勸業富国的一端に供し、亦以て当業者を警醒誘掖するところあらんを期す」とその目的が示されている。しかし、これは全体約200ページのうち、わずか数ページを占めるのみであった。<sup>(31)</sup>

横井は『太陽』創刊号の論説欄に記事を寄せているが、一方で『日本農業新誌』そのものは農業社へ譲渡し、刊行を継続した。したがって、『日本農業新誌』は『太陽』の前身誌の一つではあるが、吸収されて消滅したわけではない。

また、『日本農業新誌』の払込済み購読料に余りがある読者には、代わりに『太陽』が発送されることになっていた。このこともあってか、翌年の農業社刊行『日本農業新誌』の発行部数は博文館時代の3分の1程度にまで減少した。<sup>(32)</sup> 博文館刊



行の『日本農業新誌』の概略は以上の通りである。

雑誌というメディアを用いて農事改良を志す横井は、博文館から切り離された後も、『日本農業新誌』の刊行を維持した。譲渡先の農業社は、後に東京農書館と改名し農書の専門会社となるが、詳細については本稿では立ち入らないこととする。

#### 4 明治期農業雑誌の研究可能性

本節では、明治期に農業を扱った雑誌の持つ特徴を述べるとともに、研究対象としてどのようなアプローチが考えられるかを述べていく。先行研究にいうところの「農事改良雑誌」の最も特徴的な点は、読者間の相互交流である。この点に注目し、従来の研究とは異なる形での接近を試みたい。

明治期の日本農業には、他の諸産業と異なっている点が二つ指摘できる。一つは、その地理的条件の違いが大きい点である。日本列島は南北に長く、地形も急峻である。東北地方の農業と九州地方の農業、あるいは平野部の農業と高地の農業では実際の運用が多少なりとも異なるであろうことは想像に難くない。また、金融業や鉱工業のように、工学的にデザインされたシステムを画一的に導入するということが比較的難しい産業でもある。

二つ目は土着的であるがゆえの、過去からの強い連続性である。それまでそれぞれの地方の農民たちが伝えてきた方法や慣習を、たとえば政府が舶来の新技術の導入によって合理化・効率化しようと試みたとしても、それが他産業に比べてうまくいきにくい状況にあったと考えられる。

明治期の農業雑誌は、他の経済雑誌と同じように単に国策としての産業振興の旗振り役、あるいは政策議論の場であっただけにとどまらない。誌面の「読者参加型ページ」が、各地の土壌や気候などの情報、それぞれの土地に適する種苗を日本各地で共有する絶好の場をもたらした。これは他分野の経済雑誌には見られない明治期農業雑誌の大きな特徴であり、フロンティアでもある。

『日本農業新誌』は『農業雑誌』と同様に、明治期の農業雑誌における発信者と受信者の関係の特徴が良く読み取れる雑誌であると考えられる。すなわち、鉱業や海運など他の分野の雑誌のように、ある高名な学者や思想家、または成功を収めた実業家などが「御高説を垂れる」のみならず、問答欄や報告などで一般の読者たちも誌面に顔を出すという点である。

高名な学者は理論を説き外国の技術を紹介するが、それを実践するのは他でもない、読者たる農民である。したがって、理論や技術を講ずる学者自身がそれらを日本各地で実践するわけにいかない以上、現場の読者が雑誌上で報告することになる。

このような構図で、読者である実践者はすなわち報告者となり著者となる。言い

換えれば、本来想定されている発信者と受信者の間での情報の流れとは異なった方向の情報の流れによって、両者は互いにフィードバックしあっているのである。例としては、読者による各地での名産品調査に賞金を出すなどして、『日本農業新誌』がこの「情報の双方向性」を歓迎したことなどが挙げられる。また、種苗欄などによって読者同士の主体的な交流の場が設けるなど、「編集部と読者」のみならず「読者と読者」の間においても双方向的なやり取りがなされていたのは特筆すべきであろう。

以上のような、明治期の農業雑誌だからこそ存在する独特なコミュニケーションの構造は、これまで重要視されてこなかった。発信者とその内容こそが対象となる変数項であり、雑誌の構成や読者は定数項にしかすぎないというこれまでの農業雑誌研究から一歩進んで、メディアとしての農業雑誌の可能性を追究していくとするならば、『日本農業新誌』は無視できない雑誌になるだろう。

従来の農業雑誌に関する研究では、その歴史的性質が強く意識されていた。農業雑誌を時期ごとに区切った上で、その性質を明らかにしていくアプローチが主流であった。その一方で、明治期の農業雑誌には広い範囲に頒布された雑誌の他に、地域ごとの農会などで発行していた雑誌が多数あったことがわかっている。<sup>(33)</sup>それらは限定された土地の範囲の中での議論や情報を主に扱っており、『日本農業新誌』のような雑誌とは異質のものである。この両者の違いを説明できる特徴が明確になれば、たとえば新たに「広域農業雑誌」と「地域農業雑誌」という分類の可能性を見出すことができるかもしれない。<sup>(34)</sup>また、誌面に掲載されている読者の情報を集めることにより、先に挙げた福澤(2005)のような、雑誌の受容に関わる研究にも進展を期待できる。

さらに『日本農業新誌』の特徴としては、様々な属性の読者が誌面に現れる点が挙げられる。論説を寄せる学士等の専門家の他に、地方実地家たる豪農や、もう少し規模の小さい農家の投書も見える。この中間に位置しているいわば「セミプロ」としての豪農が、この雑誌においては重要な役割を担っていると考えられる。<sup>(35)</sup>

もう一つ付け加えるとすれば、学農社の『農業雑誌』は長期間にわたって安定して発行を続けたが、先に見たように『日本農業新誌』はそうでなかったという点も挙げられる。博文館は総合書籍商、農業社は総合農業商であり、東京農書館は農書を専門に扱っていた。このような足跡をたどった『日本農業新誌』には、『農業雑誌』とはまた違った研究価値があるはずである。

たとえば以上のように、明治期の農業雑誌には、さらなる研究のための視角が数多く残されている。

## おわりに

戦前期の農業雑誌を対象とした研究は、これまで経済思想史の領域として主に扱われてきており、「経済雑誌」の一分野として研究されてきた。この枠組みの中では、日本経済そのものの歴史や特定の思想家を知るための資料として重点が置かれてきた。そのためか、比較的多くの読者を獲得していたにもかかわらずこれまで大きく取り上げられてこなかった雑誌も多く存在すると思われる。『日本農業新誌』も、そのような境遇にある農業雑誌の一つである。しかし、従来の枠組みを越えた視座からは、まだまだこの雑誌は研究対象として十分堪えうるものであると思われる。

明治維新を迎えて近代国家としての日本が成立していく中で、交通・流通の利便が向上し、末端読者間の共時的な相互交流が可能になった。これによって共有されるさまざまな情報や物品は、国内の農業を統一し、効率化する力の支えになっただろうと考えられる。政府をはじめとする専門家によるトップダウン型の農業政策と、実務家としての農民によるボトムアップ型の農業改良という、明治期における二つの流れの両方にこの農業雑誌というメディアは影響を与えたであろう。しかし、その研究余地は十分に認識されているとは言えず、このようなアプローチからの研究は未だ手薄なのが現状である。

これからの課題としては、本稿で述べたような問題意識に基づいて、読者・受容の側から明治期農業雑誌を捉えなおす試みを進めていくことを掲げておきたい。また、博文館から切り離された後の『日本農業新誌』について、どのような経緯を経て廃刊となったのかを追うことも重要であると考えている。この点についても、稿を改めて論じたい。

- (1) その後、出版社を変えて同32年(1899)3月まで継続する。
- (2) 警視庁編『警視庁統計書』(クレス出版、1997)によると、月2回の発行であった明治26年(1893)には、年間で211,017部が出回ったという。そのうち82,626部が東京府下への配布、残りの128,391部は他府県への配布であるとされている。この数値は、明治9年(1876)から大正9年(1920)まで続くライバル誌『農業雑誌』と比較しても遜色なく、『日本農業新誌』は当時を代表する農業雑誌の一つであったといえる。
- (3) たとえば、国立国会図書館や岩手大学図書館などでは、博文館刊行の前半3年分が所蔵されておらず、出版社変更後のもののみ所蔵されている。逆に、同志社大学図書館や日本大学経済学部図書館などでは、博文館時代のもののみ所蔵となっており、いわば「所蔵の断層」がここにあると言える。このような状況から、本稿ではとりあえず、博文館刊行の前半3年分の『日本農業新誌』を対象としている。

- (4) 農業発達史調査会『明治農業雑誌界の概観——農業事情の一反映として——』（『農業発達史調査会資料』60、農業発達史調査会、1951.9）。
- (5) ただし誌名が『日本農会新誌』となっており、この名前の雑誌は存在が確認できなかった。この調査が明治新聞雑誌文庫の所蔵によっていることや、創刊年が明治25年と同一であることから『日本農業新誌』を指していると考えられるため誤植と考えるのが妥当であるが、これは推測の域を出ない。ただ、これが誤植であるとするならば、単純な目録・統計以外の調査・研究において初めて『日本農業新誌』が言及されたものということができる。
- (6) 杉原四郎「明治20年代の経済雑誌——博文館の諸雑誌を中心として——」（『甲南経済学論集』11（1）、1970.6）。
- (7) 杉原四郎「古典派経済学と『東京経済雑誌』（長幸男・住谷和彦編『近代日本経済思想史』1、有斐閣、1969）などで触れられている。
- (8) 杉原四郎「河上肇と『日本農業雑誌』（『甲南経済学論集』19（4）、1979.3）などで扱われている。
- (9) 杉原は両誌を並べて「明治時代の経済雑誌の代表的存在」としている（杉原四郎「大正時代の経済雑誌」（『甲南経済学論集』15（4）、1975.3））。
- (10) これはたまたま対象が雑誌であったということであって、研究のアプローチとしては単行本と大きくは変わらない。この分野の研究においては、雑誌そのものというより、その内容や著者の方を重視している。
- (11) 藤井隆至編『日本農業新聞雑誌所蔵機関目録1868-1945』（日本経済評論社、1986）。
- (12) 杉原四郎『日本の経済雑誌』（日本経済評論社、1987）。
- (13) 杉原四郎編『日本経済雑誌の源流』（有斐閣、1990）。
- (14) 同上、p.1。
- (15) 同上、p.127。
- (16) 同上、p.129。
- (17) 友田清彦「学農社『農業雑誌』総目次1 第1号～第48号」（『農村研究』76、1993.3）、同「学農社『農業雑誌』総目次2 第49号～第96号」（『農村研究』77、1993.9）、同「学農社『農業雑誌』総目次3 第97号～第147号」（『農村研究』78、1994.3）。
- (18) 友田清彦「明治初期における農業雑誌の地方的展開——京都府『勸農新報』の事例」（『日本農業経済学会論文集』2004年度、日本農業経済学会、2004）。
- (19) 福澤徹三「農業雑誌の受容と実践——南多摩郡平尾村 鈴木静蔵の事例を中心に——」（『一橋論叢』134（4）、2005.10）。
- (20) 川俣茂「横井時歌」（白井勝美ほか編『日本近現代人名辞典』（吉川弘文館、2001））。
- (21) この『産業時論』のさらに前身にあたとされる雑誌『農界叢誌』（1889-1890、農界叢誌社、主幹・高橋昌）が日本で最初の「農業経済雑誌」であるという指摘がある。（藤井隆至「明治時代の農業経済雑誌——農業雑誌の史的展開——」（『書誌索引展望』5（3）、1981.8））。
- (22) 時期としては、横井が農商務省技師を辞してから、帝国大学農科大学教授となる頃にあ

たる。

- (23) 坪谷善四郎『博文館五十年史』（博文館、1937）、p.61。
- (24) 前出、杉原（1970）ではこの「経営困難」を経済的な困難と捉えている。さらに、横井が『産業時論』を創刊したのが技官を辞した後であったこと、翌年帝国大学教授となつてからこの申し出をしたことを考慮すると、産業時論社から博文館への譲渡は経済的理由だけではなく、横井自身が多忙になったことによる「経営困難」も理由の一つとして挙げられるかもしれない。
- (25) 編輯者は涌井武次郎、発行兼印刷者は坪谷善四郎。
- (26) ちょうどこの時期、博文館は中等教科書事業が軌道に乗り、小学教科書事業にも進出しようとしていた（前出、坪谷1937）。
- (27) 郵便切手による代用は一割増しとされている。また、「館友」であれば一割引きとされている。
- (28) 主に著名人の肖像画や建物、農産品の新品種などが扱われた。
- (29) 『産業時論』の頃よりも読者数が増えたために、掲載基準に達しない投書が増えたのではないかと推測される。
- (30) また、第2巻16号からは「農民倶楽部記事」というコーナーも設定された。「農民倶楽部」は、この年に横井が事務局を自宅に置いて組織した研究会であり、『日本農業新誌』はその機関誌としての役割も担っていたと言える。
- (31) そのためか、『太陽』に関する研究において、『日本農業新誌』は単に農業欄の前身であると触れられるだけの存在となっている。
- (32) 前出、警視庁編（1997）。但し、誌名が『日本農業雑誌』とされている。この点は既に福澤が指摘している（前出、福澤（2005））。
- (33) 前出、藤井（1986）。
- (34) これまで研究されてきたメジャーな「広域農業雑誌」だけでなく「地域農業雑誌」に関する研究が進めば、たとえば地域史や農業社会学などの研究に利用される余地がより広がるのではないだろうか。また、広域性という観点からの分類の理論は、内容からの分類とは一歩進んで、明治期に限らず現代に至るまであらゆる農業雑誌に適用できる可能性が高く、説明として汎用的であると思われる。現代においては当然とみなされている雑誌の広域性や地域性といった分類は、明治期においては逆に特殊なものであったとも考えられる。
- (35) たとえば、学者たちの理論を理解し、実践することができ、なおかつ一般読者に説明できたという点である。これは誌面の構成にも反映されている。

『日本農業新誌』総目次

| 発行年月日     | 巻号   | コーナー | タイトル                      | 著者の属性(学位・住所・号等) | 著者                  | 頁数 |
|-----------|------|------|---------------------------|-----------------|---------------------|----|
| 1892.1.5  | 1巻1号 |      | 後醍醐天皇御製歌                  |                 |                     | 口絵 |
| 〃         | 〃    | 社説   | 廿五年の新文壇                   |                 |                     | 1  |
| 〃         | 〃    | 論説   | 農務上の施設                    | 農学士 農芸化学士       | 押川則吉                | 3  |
| 〃         | 〃    | 〃    | 窒素給源及び其利用法                | 農学士             | 古在由直                | 6  |
| 〃         | 〃    | 〃    | 明治廿五年蚕業をトす                |                 | 松永伍作                | 9  |
| 〃         | 〃    | 〃    | 米作肥料規則                    | 農学士 農芸化学士       | 酒匂常明                | 10 |
| 〃         | 〃    | 講義   | 人糞肥料に就て                   | 農学士             | 中村彦                 | 17 |
| 〃         | 〃    | 雑録   | 長野県生糸の沿革(農商務省調査)          |                 |                     | 21 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 食八人の天とする所                 | 楓軒              | 小宮山昌秀               | 23 |
| 〃         | 〃    | 随記   | 帯色葱頭栽培法(ほか13件)            |                 |                     | 26 |
| 〃         | 〃    | 余興   | 狂画                        |                 |                     | 35 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 発句                        |                 | 夜雷庵金羅(本文:<br>夜雪庵金羅) | 36 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 小説(福の神——新商店(お世辞を<br>言ひな)) |                 | 弦斎居士                | 36 |
| 〃         | 〃    | 通信   | 稲作試験成績                    | 西閉伊農事検範所        | 内田福藏                | 39 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 陸稲栽培法                     | 常陸国河内郡岡田村       | 橋本長樹                | 42 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 果樹栽培法の勧誘(本文:果樹栽培<br>の勧誘)  | 甲斐国西八代郡高田村      | 豊果園                 | 43 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 土中水分の区別                   | 鳥取県伯耆国久米郡大谷村    | 藤井伊藏                | 44 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 岩手県通信                     |                 |                     | 46 |
| 〃         | 〃    | 寄書   | 農民諸君の御参考                  | 農学士             | 中村鎮太郎               | 46 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 最少養分律に関する疑                |                 | 篤溪散士                | 47 |
| 〃         | 〃    | 問答   | 質問新題                      |                 |                     | 49 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 応答之部                      |                 |                     | 50 |
| 〃         | 〃    | 時事   | 御祝詞(ほか9件)                 |                 |                     | 53 |
| 〃         | 〃    | 種苗交換 | 米国種番椒ト稷稻二種(ほか1件)          | 茨城県河内郡岡田村       | 橋本長樹                | 56 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 旧産業時論愛読者諸君へ稟告す            |                 |                     | 56 |
| 〃         | 〃    | 官報   | 緑綬褒章下賜(ほか5件)              |                 |                     | 57 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 日本農業新誌兼題俳句募集              |                 |                     | 58 |
| 1892.1.20 | 1巻2号 |      | 大久保利通公・品川弥二郎公肖像<br>画      |                 |                     | 口絵 |
| 〃         | 〃    | 社説   | 農会の衛生術                    |                 |                     | 1  |
| 〃         | 〃    | 論説   | 代耕法は如何に組立つべきや             | 農学士             | 中村彦                 | 3  |
| 〃         | 〃    | 〃    | 大麦に就て                     |                 | 船津伝次平               | 6  |
| 〃         | 〃    | 〃    | 窒素給源及び其利用法(承前)            | 農学士             | 古在由直                | 6  |
| 〃         | 〃    | 講義   | 乾田に於ける冬耕と春耕の利害并<br>に稲の裏作  | 農学士             | 中村彦                 | 11 |
| 〃         | 〃    | 雑録   | 神奈川県秦野煙草の沿革(農商務<br>省調査)   |                 |                     | 19 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 俚諺鈔                       |                 |                     | 22 |
| 〃         | 〃    | 随記   | 豌豆跡の胡蘿蔔(ほか5件)             |                 |                     | 22 |

| 発行年月日    | 巻号   | コーナー | タイトル                           | 著者の属性(学位・住所・号等) | 著者    | 頁数 |
|----------|------|------|--------------------------------|-----------------|-------|----|
| 〃        | 〃    | 余興   | 地価修正                           |                 | 今西鶴   | 25 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 小説(福の神——百度参り(倦厭ました))           |                 | 弦斎居士  | 26 |
| 〃        | 〃    | 通信   | 畦畔改良                           |                 | 鈴木浦八  | 29 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 薬物貯蔵法                          | 埼玉県榛澤郡武川村 蓑笠子   | 小川武一  | 31 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 薬の話                            | 越後三島郡           | 山田木平  | 34 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 稲作試験成績                         | 宮崎県北那珂郡青島村      | 松田拾蔵  | 38 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 蚕糸一覽                           | 静岡県豊田郡          | 坂部要司  | 40 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 寒梅香を培す簡易法                      | 越後国中魚沼郡干手町      | 雪ノ本逸我 | 40 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 人害動物駆除法                        | 播磨              | 大上宇市  | 40 |
| 〃        | 〃    | 寄書   | 偶々総撰挙あるに当りて農民と撰挙法との関係を嘆す       |                 | 文適家醉理 | 41 |
| 〃        | 〃    | 問答   | 質問新題                           |                 |       | 43 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 応答之部                           |                 |       | 44 |
| 〃        | 〃    | 時事   | 臨時撰挙の詔勅(ほか14件)                 |                 |       | 48 |
| 〃        | 〃    | 種苗交換 | 黄蓮(ほか1件)                       | 播磨国揖東郡篠首村       | 大上宇市  | 51 |
| 〃        | 〃    | 官報   | 緑綬藍綬褒章下賜(ほか5件)                 |                 |       | 52 |
| 1892.2.5 | 1巻3号 |      | 北米合衆国ロッキイ山鉄道ノ眺望                |                 |       | 口絵 |
| 〃        | 〃    | 社説   | 信用組合                           |                 |       | 1  |
| 〃        | 〃    | 論説   | 実業教育は急務中の急務なり                  | 農学士             | 澤村真   | 3  |
| 〃        | 〃    | 〃    | 甲州葡萄酒の病菌の説                     | 理学士             | 白井光太郎 | 5  |
| 〃        | 〃    | 〃    | 農会法案は如何                        | 農学士             | 高橋昌   | 7  |
| 〃        | 〃    | 〃    | 代耕法は如何に組立つべきや                  | 農学士             | 中村彦   | 11 |
| 〃        | 〃    | 講義   | 神奈川県北多摩郡稲作改良試験                 | 農学士             | 横井時敬  | 14 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 民法及び商法中農業に関する科条の評論             | 農学士             | 熊谷繁三郎 | 16 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 清酒                             | 農学士             | 山田惟正  | 18 |
| 〃        | 〃    | 雑録   | 岩手県牧馬沿革(農商務省調査)                |                 |       | 21 |
| 〃        | 〃    | 随記   | 土地の利用(ほか10件)                   |                 |       | 24 |
| 〃        | 〃    | 余興   | 兼題俳句披露(夜雪庵金羅宗匠撰)               |                 |       | 27 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 小説(福の神——古帽子(それ見たか))            |                 | 弦斎居士  | 29 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 狂画                             |                 |       | 32 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 詩歌                             | 虎野夫             | 酒井為太郎 | 33 |
| 〃        | 〃    | 通信   | 山形県飽海郡稲作試験の成績                  |                 | 飽海郡長  | 36 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 茄子栽培法                          | 武州入間郡川角村        | 浅見嘉治  | 36 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 蚕兒飼育法の梗概                       | 福島県伊達郡飯野村       | 高野倉吉  | 37 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 螟虫の患を去り苗の生長を宜くするの策を陳して世の農業家に問ふ | 千葉県             | 野平恒治  | 38 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 牛蒡肥料として麦秕の効                    | 茨城県河内郡八原村 香耕園   | 鴻巣国蔵  | 39 |
| 〃        | 〃    | 〃    | 諸動植物の効能実験                      | 茨城県河内郡八原村 香耕園   | 鴻巣国蔵  | 39 |

双方向メディアとしての明治期農業雑誌

| 発行年月日     | 巻号   | コーナー | タイトル                         | 著者の属性(学位・住所・号等)    | 著者            | 頁数 |
|-----------|------|------|------------------------------|--------------------|---------------|----|
| 〃         | 〃    | 寄書   | 小作米改良法                       | 群馬県                | 東山逸民          | 40 |
| 〃         | 〃    | 問答   | 質問新題                         |                    |               | 41 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 応答之部                         |                    |               | 42 |
| 〃         | 〃    | 時事   | 鉍毒事件に関する鎖事(ほか18件)            |                    |               | 45 |
| 〃         | 〃    | 種苗交換 | 外国稲種                         | 兵庫県津名郡鮎原村          | 広田孫彦          | 48 |
| 〃         | 〃    | 官報   | 米作改良成績(農商務省)(ほか2件)           |                    |               | 48 |
| 1892.2.20 | 1巻4号 |      | 米国ボストン府ウエルスレー花園之景            |                    |               | 口絵 |
| 〃         | 〃    | 社説   | 蚕糸業改良策 第一稿                   |                    |               | 1  |
| 〃         | 〃    | 論説   | 農民ハ商事に敏ならざる可らず               | 農学士                | 渡部朔           | 3  |
| 〃         | 〃    | 〃    | 苦塩汁撰せる麦種子の発芽                 | 在福岡県勸業試験場 農学士      | 大塚由成          | 6  |
| 〃         | 〃    | 〃    | 鉅鱗の肥料用分析                     | 農学士                | 東条平二郎         | 7  |
| 〃         | 〃    | 〃    | 代耕法ハ如何に組立つべきや(承前)            | 農学士                | 中村彦           | 8  |
| 〃         | 〃    | 講義   | 清酒(承前)                       | 農学士                | 山田惟正          | 11 |
| 〃         | 〃    | 雑録   | 農業上に関する各種の習慣                 |                    |               | 15 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 北海道巡覧記                       |                    | 天劍子           | 17 |
| 〃         | 〃    | 随記   | 油菜の産地(ほか5件)                  |                    |               | 20 |
| 〃         | 〃    | 余興   | 小説(福の神——好都合(どしどし儲かる))        |                    | 弦斎居士          | 24 |
| 〃         | 〃    | 通信   | 茄子栽培法附食用法                    | 武蔵国比企郡唐子村上唐子 鳳香園主幹 | 新井歌吉          | 27 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 落花生の事                        | 武蔵国比企郡唐子村上唐子 鳳香園主幹 | 新井歌吉          | 27 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 蕙苺栽培並に効用                     | 常陸国河内郡岡田村          | 橋木長樹(本文:橋本長樹) | 31 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 煙草栽培試験成績                     | 岩手県西閉伊郡綾織村         | 内田福蔵          | 32 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 毛蚕三去法                        | 常陸国河内郡岡田村          | 池田繁           | 33 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 茄子カラシ漬法                      | 常陸国河内郡岡田村          | 池田繁           | 34 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 大豆の良種                        | 埼玉県比企郡大河村字増尾       | 杉田文蔵(本文:杉田文三) | 34 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 循環耕作とイヤ地                     | 新潟県下越後国古志郡王内村      | 山崎三太郎         | 35 |
| 〃         | 〃    | 寄書   | 北海道移住民に就て                    | 奥堂耕夫               | 岩崎寛           | 36 |
| 〃         | 〃    | 問答   | 質問新題                         |                    |               | 39 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 応答之部                         |                    |               | 41 |
| 〃         | 〃    | 時事   | 日本製茶の大敵(ほか17件)               |                    |               | 47 |
| 〃         | 〃    | 種苗交換 | 良稻二種(ほか6件)                   | 武蔵国比企郡唐子村 鳳香園主幹    | 新井歌吉          | 50 |
| 〃         | 〃    | 官報   | コロンブス世界博覧会録事(臨時博覧会事務局)(ほか3件) |                    |               | 51 |
| 1892.3.5  | 1巻5号 |      | 群馬県富岡製糸所工場之図                 |                    |               | 口絵 |
| 〃         | 〃    | 社説   | 蚕糸業改良策 第二稿                   |                    |               | 1  |



| 発行年月日     | 巻号   | コーナー | タイトル  | 著者の属性(学位・住所・号等) | 著者    | 頁数 |
|-----------|------|------|---|-----------------|-------|----|
| 〃         | 〃    | 論説   | 農務上の所感  | 農学士 農芸化学士       | 押川則吉  | 4  |
| 〃         | 〃    | 〃    | 河流汚濁に関する法理一斑                                  | 農学士             | 澤村真   | 8  |
| 〃         | 〃    | 〃    | 横井農学士農業範圍論の誤謬                                 | 農学士 農芸化学士       | 酒匂常明  | 10 |
| 〃         | 〃    | 講義   | 民法及び商法中農業に関する科条の評論(承第三号)                      | 農学士             | 熊谷繁三郎 | 14 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 清酒(承前)  | 農学士             | 山田惟正  | 17 |
| 〃         | 〃    | 雑録   | 阿州藍の沿革(拠農商務省調査)                               |                 | 小宮山綴介 | 20 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 延享常陸民間遺事(本文:延享常陸民間旧事)                         |                 | 天劍子   | 21 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 北海道巡覧記(承前)                                    |                 |       | 24 |
| 〃         | 〃    | 随記   | 蚕種の保護(ほか6件)                                   |                 |       | 26 |
| 〃         | 〃    | 余興   | 小説(福の神——目出度ひな(アラ目出度ひな))                       |                 | 弦斎居士  | 30 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 詠動農長歌并に反歌                                     | 上毛              | 折茂保秀  | 32 |
| 〃         | 〃    | 通信   | 草綿栽培法   |                 | 大坂農学生 | 33 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 藍栽培法  | 福岡県             | 一一生   | 34 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 人害動物駆除法                                       | 播州              | 大上宇市  | 35 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 農家年中行事  | 栃木県下都賀郡         | 加藤耕圃  | 36 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 北海道事情随録                                       |                 | 芽原次六  | 37 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 桑株鉢   |                 |       | 38 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 桑株鉢説明   |                 |       | 39 |
| 〃         | 〃    | 寄書   | 林相論   | 農科大学学生          | 八戸道雄  | 40 |
| 〃         | 〃    | 問答   | 質問新題  |                 |       | 43 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 応答之部  |                 |       | 45 |
| 〃         | 〃    | 時事   | 祝詞の叢(ほか12件)                                   |                 |       | 49 |
| 〃         | 〃    | 種苗交換 | たむし草及細辛の分与(ほか1件)                              | 播磨国揖東郡篠首村       | 大上宇市  | 51 |
| 〃         | 〃    | 官報   | 緑綬褒章下賜(ほか1件)                                  |                 |       | 51 |
| 1892.3.20 | 1巻6号 |      | 仏国ライン河畔大葡萄園ノ図                                 |                 |       | 口絵 |
| 〃         | 〃    | 社説   | 蚕糸業改良策 第三稿 蚕糸両業分離策                            |                 |       | 1  |
| 〃         | 〃    | 論説   | 遊離窒素と荳科植物に関するリーゲル及ウキルファルトの試験(本文:~に関するヘリーゲル及~) | 農学士             | 澤村真   | 3  |
| 〃         | 〃    | 〃    | 農業範圍論の旨趣を講し併せて酒匂学士に答ふ                         | 農学士             | 横井時敬  | 6  |
| 〃         | 〃    | 〃    | 銅塩生長植物に及ぼす感応                                  | 農学士             | 古在由直  | 11 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 全葉飼育法に就て                                      |                 | 吉池慶正  | 13 |
| 〃         | 〃    | 講義   | 民法及商法中農業に関する科条の評論(承前)                         | 農学士             | 熊谷繁三郎 | 16 |
| 〃         | 〃    | 雑録   | 茨城県煙草の沿革(拠農商務省調査)                             |                 |       | 21 |
| 〃         | 〃    | 〃    | 延享常陸民間旧事(承前)                                  |                 | 小宮山綴介 | 22 |
| 〃         | 〃    | 随記   | 鼯鼠(ほか3件)                                      |                 |       | 26 |

双方向メディアとしての明治期農業雑誌

| 発行年月日 | 巻号 | コーナー | タイトル                | 著者の属性(学位・住所・号等) | 著者   | 頁数 |
|-------|----|------|---------------------|-----------------|------|----|
| 〃     | 〃  | 余興   | 小説(福の神——神争ひ(何れが真誠)) |                 | 弦斎居士 | 28 |
| 〃     | 〃  | 〃    | 狂画                  |                 |      | 30 |
| 〃     | 〃  | 通信   | 葡萄樹を害する鉄砲虫駆除法       | 千葉県北総香取郡古城村     | 伊藤芳松 | 32 |
| 〃     | 〃  | 〃    | 蚕兒飼育法の梗概(前承)        | 福島県伊達郡飯野村       | 高野倉吉 | 32 |
| 〃     | 〃  | 〃    | 玉蜀黍の最良種             | 武蔵国比企郡唐子村 鳳香園主幹 | 新井歌吉 | 35 |
| 〃     | 〃  | 〃    | 中稲近江と大黒糶に就て         | 武蔵国比企郡唐子村 鳳香園主幹 | 新井歌吉 | 37 |
| 〃     | 〃  | 〃    | 軽便梶挽器械真棒試用実験        | 群馬県邑楽郡中野村大字鶉新田  | 小倉和作 | 37 |
| 〃     | 〃  | 寄書   | 林相論(承前)             | 農科大学学生          | 八戸道雄 | 38 |
| 〃     | 〃  | 〃    | 小作改良法を読む            | 新潟県             | 大沼鉄藏 | 40 |
| 〃     | 〃  | 問答   | 質問新題                |                 |      | 41 |
| 〃     | 〃  | 〃    | 応答之部                |                 |      | 42 |
| 〃     | 〃  | 時事   | 農商務大臣の交迭(ほか20件)     |                 |      | 48 |
| 〃     | 〃  | 種苗交換 | 陸稲と大豆(ほか7件)         | 栃木県下都賀郡国府部大字田   | 加藤直吉 | 50 |
| 〃     | 〃  | 官報   | 緑綬褒章下賜(ほか1件)        |                 |      | 51 |

(いしかわ・ゆうき／早稲田大学大学院)